

児童図書の領域区分と分類 Genres and Classification of Children's Literature

渡 辺 茂 男

Shigeo Watanabe

Résumé

The word "children" used by children's librarians covers wide range of age, interest and reading abilities, from the preschool and kindergarten through junior high school; thus the term "children's literature" could mean any literature that children can intellectually comprehend and can mentally thrive on.

But it is a kind of term most conveniently used to cover the varied subject areas. Sometimes it is used in a restricted sense to imply only productions of literary merit and in other occasions it is used to cover every type of readings the children enjoy, excepting their school textbooks. Historically the connotation naturally varies from period to period as book materials for children have changed and developed.

Yet as the time has gone by the books for children have developed to such extent as they have become to be able to meet different needs of individual children. And at the same time variety in types and subjects of the present day children's books present not a few problems for the library processing.

To organize the children's book collection to be used most effectively by different users it is necessary to define the scope of the children's literature in different terms from the literary point of view and to analyze the literary genres, types, subject areas of children's books, and their inter-relationship. Other important facets are the analysis of characteristics of users; their age levels or developmental stages, interest, reading abilities, and different motives.

These facets will influence to set up a classification scheme to be used to meet a given situation; and when and how a standard numerical classification scheme can be applied to the children's book collection.

序

I. 定 義

1. 文献と文学
2. Children's literature の種々な解釈

II. 児童図書の領域区分と分類

1. 児童図書の領域区分
2. 児童図書の分類
3. 結 論

III. 児童図書の利用者

1. 公共図書館における利用者
2. 学校図書館における利用者
3. 大学, 研究所図書館における利用者

結 び

序

およそ人間の読書活動において、児童期における読書習慣の形成を無視することはできない。家庭において、学校において、また社会において、児童の読書問題は真剣に論じられている。また、読書施設面についても、学校図書館、児童図書館、PTA 母親文庫等、充実をみせつつある。出版の分野においても、児童図書は、有力なマーケットを持ち、大小併せて相当な数の出版社が、児

童図書を出版し、出版量においては、世界的に重要な位置を占めるといっても差支えない。

また研究面においても、読書指導、児童文学などが研究の対象として真剣に取り上げられるようになってきた。しかしながら、読書指導に関しては、指導の理論、技術の研究が中心であり、児童文学に関しては、文学史的研究、あるいは作品研究などの狭義の文学研究の域をでない。また、広い領域では、ジャーナリスティックな児童文化論は多くあるが、観念論、理想論に終始しているか、奇形的現象だけを捉えてそれを一般化しようとするかである。

しかし、一旦、図書館プロパーの領域に目を向けると、図書館資料を物理的整理の対象としてのみ見、その内容を如何に捉え利用者と結びつけていくかという面で弱い一般的な傾向が、児童図書の取扱いの面にも如実にあらわれている。即ち、学校図書館資料や児童図書館資料の中核をなす児童図書を内容的におさえずに、物理的に処理しようとする。その最も顕著なあらわれが、技術的処理としての分類の在り方であり、児童の読書興味、発達段階、児童図書の内容を無視した分類のための分類が多いことである。

この小論文は、今後わが国において発展することと思われる児童図書の研究と、図書館における児童図書の技術的処理の改善に役立つ方向として、イギリス及びアメリカにおける児童図書研究の動向及び児童図書館における実際を引用しながら、児童図書の領域区分と分類の関係を分析しようと試みたものである。

I. 定 義

1. 文献と文学

“文学を言語によって表現されたもの全体というように解するならば、文学とは極めて広いものを指すことになる。法然の登山状も、貝原益軒の十訓も、西川如見の天文義論も、佐藤信淵の経済要録もみな文学の中に入ってくる。そうすると、文学の形而上学とは言語の形而上学というようなものになって来る。いま私は言語の形而上学を取扱おうとはしていない。すなわち文学ということをもっと狭い意味に解して、言語によって表現された芸術と見て、そういう言語芸術としての文学の形而上学を主題としている……”¹⁾

この引用は、九鬼周造が、文学の形而上学を論ずるに当りその冒頭で文学の範疇を規定したものである。図書館学に於ても、ある特定の主題を論ずるに当って使用

する用語の範疇なり定義を規定して論旨を展開していかないと、特に他の学問分野で同じ用語を使用する場合と比較して混乱を生ずるおそれがある。例えば、文字言語によって表現されたもの全体を図書館学の立場では、普通これを文献と呼ぶ。もし、図書館学の立場で、この全体を文学とする広い解釈——文学上では一つの定義として認容されているものであっても——を適用しようとするれば、その解釈自体が意味のないものに等しくなる。というのも、文字言語は言語芸術としての文学の道具であるばかりでなく、あらゆる知識分野のコミュニケーションの媒体でもあり、従って、その内容と形式の如何にかかわらず、図書館の蔵書はすべて文学となってしまうからである。換言すれば、現在図書館資料と見なされる図書、雑誌、パンフレット、などの内容はすべて形態の如何を問わず、言語を媒体とする限り、広義の文学資料と解されてしまうのである。

では、文字言語によって表現された芸術を文学とする狭義の解釈は、どうであろうか。われわれは、この解釈の意味するものを観念的に理解することはできるが、利用のために資料を区分する必要がある図書館の立場では問題が起る。すなわち、一般の小説や詩も、民話や伝説や俗話も、その中に芸術性が認められる限りすべて文学とすれば、内容と形式の結びつきによる区分が甚だ漠然としたものになる。

おそらく文学に関する定義は無数に存在していると思われるが、全く思いつくままにその一つを取り上げてみよう。“文学とは、自然と生命の意味を伝える作品のことである。それは、美しさと力強さを持つことばで語られ、作者の個人性を加味し、しかも、永続的に興味を保持させる芸術形式をもって書かれたものである。”²⁾ここでは、この定義をだれがしたかは問題ではない。また、このような定義の仕方が、文学上どれほど価値があっても(あるいは、価値がなくても)、図書館学の立場からみれば、適用できる文学の定義とはならない。即ち、図書館学の実際への適用、つまり、文学という主題に関して図書を選択収集しようとする場合に、この定義の内容は前同様観念的に理解することは容易であるが、収集の具体的指針としては、何の役にも立たないのである。

しかしながら、文学は言語芸術であるという狭義の解釈には、芸術という抽象概念の他に、当然、芸術としての形式という要素が含まれている。即ち、文学は芸術の一つの表現形式であり、さらに、文学形式の中に、それぞれ独自の特徴を持つ再分化された形式がある。普通、

われわれは、それらの分化した文学表現形式をジャンルとよんでいる。図書館学においては、このジャンルによって、また、使用された国語、時代などの要素との組み合わせによって、文学という領域の内容をつかまうとし、或いは、文学という領域を分類しようとするのである。その実地における適用が、図書館の蔵書中における文学という主題の位置づけと、その内容の範疇の問題となってくるのである。

Lester Asheim によれば、西欧の文学は、そのジャンルがギリシャ文学にその源を発しており、“アリストテレスの *Poetica* によれば、叙事詩(現代のフィクションにがい当する)、叙情詩(現代における詩にがい当する)、劇詩(詩、散文のいずれを問わず現代の戯曲にがい当する)、歴史、修辞学、哲学、及び評論があげられている。今日、常識的には文学プロパーの領域から歴史と哲学を除いているが、その境界線も実は微妙なものである……このようなジャンル (fiction, poetry, drama, oratory, and criticism) を一つのよりどころとし、さらに、“文学”の意味を *imaginative writing* に限定することによって、文学の領域を構成する多くの要素を根本的にそこなわずに、われわれに役立つ文学領域の定義ができそうである。”³⁾と述べられている。

しかしながら、ジャンルによる文学領域の定義づけも、その対象を *imaginative writing* に限定して“文学”という用語を使うとすれば、この *imaginative writing* の意味が問題となる。即ち、創作を意味するとすれば、*original writing* の本質規定を前提とすることになり、また、創作の主体である作者の存在する場合は比較的問題がないとしても、近代文学以前に発生した民話、神話、伝説のごとく、その本質は *imaginative* でありながら、その起源の *originality* を具体的に把握し難いような場合の扱いかが問題となる。また、この *imaginative writing* という用語が、想像力豊かな傑出した作品を意味するとすれば、価値判断の基準を設定することもまた不可能となる。

このように文学に関する文学上の定義を、図書館で扱う資料の一つの主題領域としての文学に適用しようとする、実用的な見地から、定義が大きすぎるか抽象的すぎて意味をなさない場合が多い。従って、図書館資料として文学の領域をみるときは、文学を文学として研究する場合に比較して、より *practical* なアプローチをとらざるを得ない。

なぜここで、文学の意義づけを図書館学的なアプロー

チから試みたかは、この論文の本題である *children's literature* の範疇が、これに *literary* な定義づけを行なう場合と、*practical* な定義づけを行なう場合で、全く異なってくる程、多様な解釈が可能であり、多くの要素を含んでいるからである。

2. *Children's literature* の種々な解釈

文学の解釈がさまざまであるのと同様、*children's literature* の解釈もさまざまである。児童文献、児童文学、児童図書など、それぞれ範疇の異なることばとして使われている。児童を対象として言語によって表現されたもの全体という広義の解釈に立てば、児童図書となり、児童を対象として言語によって表現された芸術という狭義の解釈に立てば、児童文学であると常識的にいえないこともない。

たとえば Hollowell は、“児童図書館員によって使われる *children* (児童) という用語は、年令的には学令期以前、幼稚園児から中学生全体を含む児童で、年令的にも、興味関心の点でも、また読書能力の点でも、非常に広い対象を意味している。したがって *children's literature* という用語は、児童の立場にたって児童を理解し、児童期のあらゆる経験に自己を即させる能力を持つ人びとの *creative imagination* (創造力) によって形づくられた作品を意味する”⁴⁾と述べている。

この定義は、前半で明かなように、広い対象であるとはいえ、児童という範疇を設定して、その児童を対象とする創作的な作品と解しており、前述した *imaginative writing* にがい当する、*creative imagination* による *composition* という創作活動に基づいた作品、という狭義の文学とうけとれる定義である。

Rawlinson は、*literature* という用語に関しては、狭義の解釈を下しながら、逆に、児童に関しては、年令的な制限というものを加えず、つぎのような定義づけを試みている。“この本で使用した *literature* という用語は、あらゆる図書を包括するのでもなく、また、必読図書をすべて含む意味で使ってはいない。ここで意味する *literature* は、美的鑑賞力を養い、生きていることの真の喜びを与える、よりすぐれた数少い作品だけを意味するのである。

子どものための *literature* は、子どもだけのための食物というものが存在しないと同様、子どもだけのための特別な文学を意味するのではない。心理的に子どもが理解でき、また、知的、情緒的にそしゃくできるものは、子どものための文学となりうるのである。”⁵⁾

Henry Steele Commager 博士は、英米の児童文学史の最も網羅的な著作として知られる “A critical history of children's literature”⁷⁶⁾ の序文で、children's literature の範囲をさらにひろげて次のように述べている。“おとぎ話、わらべ唄、エチケットやしつけや道德のたいくつな本、学校や遊び場の物語、そして冒険の本、——こんなたぐいの子ども向きに書かれたものが、児童文学なのだろうか？ これらすべてを含むのは確かだが、実際は、遙かにそれ以上のものである。子どもたちが、手のとどく限り、大人と同様に楽しみ、時には、子どもの世界で独占してしまった文学全体を指すのである。それが文字どおり、かれらの文学となったのである……”⁷⁷⁾ 天路歷程、ロビンソン・クルーソー、ガリバー旅行記など、作者の動機においても、作品そのものについても、子どもという要素とは全く無縁であったものが、時代の流れと共に、いつのまにか、文学全体の中で古典として存在すると同時に、児童文学の欠くことのできない巨星となるに至ったことは、そのよい例といえる。さらに Commager は、文学史的に児童文学を解明しようとする時、児童文学の範疇を定めるのに、読者である児童自身が、重要な役割を果たしていることについて、次のように述べている。“窮極において、何が子どものための文学であるかを決定するのは、両親でも、教師でも、牧師でも、あるいは、作者自身でもなく、子ども達自身なのである。長年にわたり、子どもたちは、かれら自身の判断、あるいは、むしろ、本能に従って本を選んできたのである。意識的にお子さま向きに作られたものを最も激しく排斥し、そうでないものを包擁しつづけてきた。”⁷⁸⁾

17 世紀から 19 世紀にかけての児童図書の変遷を辿ってみれば、Commager の説の正しいことは、歴史が如実に証明してくれるのである。しかしながら、この定義づけの中で、われわれに最も重要と思われる点は、児童文学は、児童のためにわざわざ書き下された作品だけを指すのではなく、大人のための文学の中から、長年にわたって子どもが選びだしたものをも含めるべきであるということである。

児童文学評論の名著として知られる “The unreluctant years” の中で、Lillian H. Smith は、児童文学の質に言及して、次のように述べている。“子どもの本は、文学全体と無縁に真空の中に存在しているものではない。それは、文学全体の一部であり、文学評価に共通の尺度に照らして評価されるべきものである。どのよう

な種類の図書を評価する場合にも、すぐれた図書選択を行なうためには、基本的な原則というものがその底になくはならない。したがって、子どものための図書を評価するにあたっては、子どものための文学は価値あり意義あるものであるという信念を持つことがまずたいせつである。このような信念は、児童図書に関する着実な知識と、個々の作品に対する批判力に基いて生れるのであり、そして、その批判力は、文学の古典に見出されるすぐれた作品の基本的要素に照らして培われるものである。”⁷⁹⁾

Smith の解釈は、ここで児童図書ということばがはじめて使われているように、*children's literature* という用語を使いながら、その範疇は、狭義の文学以上の広い児童図書を指している。しかしながら、その質の評価にあたって、文学上の古典のもつ質に照らしてと強調する点から、依然として、文学というコノテーションが強いのである。

このように、*children's literature* という用語の用法に関して、いくつかの解釈を引用比較してみると、これを児童文学として用いる場合の範疇は、観念的には、明確な様相を示してくる。そして、Lillian H. Smith の強調するように、古典の価値は、大人の文学の場合と同様、子どもの文学の場合も、ゆるぎないものである。古典の解釈も、Sir Arthur Quiller-Couch の述べたことばが全く同じ意味で、子どもの文学の世界にあてはまるのである。Quiller-Couch の古典に対する解釈は、図書館における図書選択の上でも、一つの哲学として非常に参考になるものであるので、長文ではあるが引用することにする。

“私たちは、どのようなことば、どのような文学を扱うとしても、結局、傑作に、すぐれた古典に、信頼をおく。そして、古典は、どんなことばで書かれても、その数も量も膨大ではないし、格別探し出しにくいものでもない。またいちばんいいことには、それ自体がむずかしくて読めないというものでもない。それらのうちから、選びぬかれたごくわずかな古典、三つでも二つでもよい、一つきりでもよい、そういう古典によって、私たちは、本当の喜びとはこうもあろうかということ、また、あるいはある程度の鑑賞力を学びとることができる。そこで、私たちの生徒は、私たちがかれらに勝手に本を読ませるようになって、内からの手引きによって、よいものを選び、悪いものをはねつけるだけの思慮を持つよ

うになるだろう。……そして、ここでは、古典が普遍性と不朽性を備えていることだけをいっておこう。真の古典は、それが人間の普遍の心に訴えるために、普遍的なのである。そして、二重の意義で不朽である。なぜなら、それが書かれた時代の条件がすぎさってしまってもなお意義を残し、新しい意義を勝ち得ていくからである。そして、それは、どのように扱われてもすりへらずに、最初に鑄造した心のオリジナルな高貴な刻印を、そのまま伝えていく。——あるいは、こういうべきだろうか。世代から世代へとそのすぐれた鑄造品が鳴りひびくたびに、鑄型のもとの魂の余韻を送りつつける、と。”¹⁰⁾

このような children's literature という用語についての文学論的な解釈は、児童図書的主要部分を占める児童文学の範疇を観念的に理解し、且つ、個々の作品を評価する際の心構えとして重要であるが、図書館において児童室の蔵書を構成する際、その内容範囲を示す具体的な指針とはならない。とすれば、児童文学というもののについての根本的な理念の把握のほかに、どうしても practical な定義を求めなければならない。しかも、この点に関しては、大人の文学は、各種のジャンルをよりどころとしてしかも imaginative writing に限るということで、一応文学領域の蔵書を構成するという指針がでたわけであるが、children's literature の場合には、このジャンルが、多くの場合、便宜的に利用され、しかも、より practical な定義づけに近づけば近づくほど literature という用語の解釈が、狭義の文学という意味よりも、広義の文献的な意味で、図書という意味に解釈される場合が多くなるのである。

たとえば Elva Smith によれば、“*children's literature* という用語は、(この本においては)、児童図書の領域を網羅するために、最も便利なことばとして使用されているのである。したがって、ある限定された意味で使っているのでもなければ、文学的に高度の質を持つ作品だけを意味するために使ったのでもない。時代により子どものための図書は変化し発展してきたために、*children's literature* という用語の connotation も、それにつれ、時代により異なっている。”¹¹⁾

また、より一層 practical な定義が、アメリカの児童図書研究コースのための代表的な教科書である“*Children and books*”の中で、Arbuthnot によって与えられている。この教科書は、教員養成大学、図書館学校に

おける children's literature の教科書として編まれたものであるが、その冒頭、children's literature の範囲について次のように述べている。“2才から14・5才までの児童の読書興味をカバーし、単に狭義の文学だけでなく、教科書を除き、子どもが手にするあらゆるタイプの読書資料を対象としたものである。”¹²⁾

以上、*children's literature* という用語についての解釈を幾つか比較検討した結果いえることは、図書館学の立場で、図書館資料として *children's literature* をみるときに、その範疇は、狭義の児童文学を含み、歴史的にみて、それを母体として発達したあらゆる主題、あらゆるタイプの児童図書ということができる。いいかえれば児童の広汎な読書興味をみたとす読書の材料を *children's literature* として解釈できるのである。しかも、ここで当然問題とされなければならないのは、大人の文学のジャンルと異った類別で使用されている児童図書の領域区分についてである。

II. 児童図書の領域区分と分類

1. 児童図書の領域区分

児童図書の領域区分は、図書館において児童図書のコレクションを収集組織する時だけでなく、児童図書の目録作製、アンソロジーの編纂、児童文学史あるいは児童図書史の執筆などに当ってその主題の範囲をおさえ、内容を組織する際に、必らず影響する問題である。特に図書館においては後述する児童図書分類の問題と切り離すことのできない要素である。しかも前述したように児童図書の場合は、あるいは児童文学と狭義に限定したとしても、アリストテレスの分類に起源をもつ、大人の文学のジャンルをそのまま適用できない事情にある。その最も大きな理由は、歴史的にみて、児童図書の範疇が、時代により異なることと、また、児童は成長に従って、児童の立場から大人の図書を読んでもしまうということから、その両者の間に、境界線を引くことができないからである。

このいわゆる文学というジャンルと異なる児童図書の領域区分は、現存する代表的な、文学史、児童図書の解説書、適書目録、児童及び読書に関する教科書、アンソロジー、蔵書目録などにおける取扱いを比較検討してみると、幾つかの傾向にまとめることができる。即ち、(1) 作品の起源に基づく分け方。(2) 児童の読書興味に基礎をおく分け方。(3) いわゆる狭義のジャンル(文学形式)と題材によるもの。(4) 児童の発達段階によるもの。

(5) いわゆる目録作製のために一定の分類コードに従うもの、および、(6)、(2)(3)と(4)の組み合わせによるものである。

(1) 作品の起源に基づく分け方。これは、Rawlinson が、“Introduction to literature for children”の中で採りあげた分け方である。“子どもに適する文学の領域を研究する場合には、文学をおおまかに二つのグループに分類すると便利である。即ち、伝承文学と非伝承文学である。”¹³⁾ Rawlinson は、traditional と non-traditional の二つのグループに分け、後者が該当する、より適切な用語を見出すことに苦心して、Sophisticated literature という誤解を生みそうな用語をこれに当てはめているが、むしろ、traditional (伝承) に対して、modern literature (近代文学)とでもした方が、より明快ではなかったろうか。しかし、いずれにしても、文字や印刷や製本を人間が思いつく以前に、人間は歌をうたい、物語を語り、その歌や物語が、口承で世代から世代に伝えられ、やがて文字に記録され、後世の人びとは、これを文学的遺産として継承したのである。このような伝承の文学の中には、伝えられたそのままの形で、子ども達に与えることのできる民話や寓話や童唄がある。また子どもたちのための神話や英雄譚のすぐれた再話が生れてきた。

そして、この土台の上に立って、近世になると、想像力を駆使して、無数の作家たちが、あるときには空想的な、あるときには現実的な物語を創作し、詩をつくってきた。

Rawlinson は、Traditional literature の系列に、Myths, Hero tales, Popular ballads, Household tales (folktales, nursery rhymes, fables) を含め、Sophisticated literature の系列に、Fanciful tales, Realistic stories, Romantic stories, Poetry をいれている。

このように、児童図書の領域を文学に限り、伝承と非伝承の二つに分ける考え方は、児童文学を、文学全体の起源から発生的に研究しようとする場合に便利であるが、児童の読書興味には必ずしも結びつかないし、図書館児童室における蔵書の配列に特に参考になる分け方でもない。

(2) 児童の読書興味に基礎をおく分け方。

イギリス図書館界の高名な指導者 Lionel R. McColvin は、その著書“Libraries for children”の中で、つぎのように述べている。“子どもは、われわれ大

人が読ませたいと願う本を読むとは限らない。われわれが、嘆かわしいと思うような本を夢中になって読むこともあれば、また、本などには何の興味も示さない子どもも多くいる。”¹⁴⁾

McColvin は、さらに、同書第2章で児童図書の種類、選択の着眼点、蔵書構成上の問題点についてくわしく触れているが、児童図書の領域区分に関連ある点を要約すれば次のようになる。¹⁵⁾

まず、図書には、ファクトに関する本と、夢と空想の本があるとする。

つぎに児童の読書興味から幾つかの種類に分けていく。子どもにとって総ての物語が冒険小説である。しかしながら、冒険小説には、大きく二つの種類がある。その一つは、読者の経験可能な範囲——家、学校、休日——で起る冒険と、もう一つは、経験の外側——空中、海、外国、スパイ活動——で起る冒険についてである。歴史小説、探偵小説、動物物語、ファンタジー、民話、神話などのように夢と空想を駆りたてながら読む本と、地理、歴史、科学、芸術など知識と鑑賞力の向上のために読む本がある。しかしながら児童図書館のとるべき態度については、あまりに子ども臭くあってはならないし、文学的すぎてもいけないし、教育的すぎてもいけないと説いている。また児童図書館員は、すぐれた文学について興味と教養を持つことは大事だが、子ども達にそれだけをおしつけてはいけなく、子どもの多くが、娯楽と実益のために本を読むことを忘れるなど忠告している。そして、そのような観点から、図書の歴史の中では一時的な存在価値しかないかもしれないが、いつの時代でも必要な児童図書の種類として、趣味、スポーツ、工作などの図書をあげている。そして、子どもの広い興味として、旅行、探険、伝記、自然(博物)などをあげ、また比較的数の少い子どもが持つ読書興味ではあるが、欠かすことのできない主題として、詩、しつけ、などの本をあげている。

また児童図書の重要な部分である幼児・低学年向けの絵本を重視し、さらに、子どもは、子どもの年令を越えて大人の本に手を伸ばすことから、子どもが読む大人の本を十分に蔵書の一部として加えるべきことを強調している。そして、この点に関しては、W. C. Berwick Sayers のことばを引用して次のように述べている。“W. C. Berwick Sayers によれば、児童室蔵書の 20 パーセントを 9 才以下の子ども向けの図書、他の 20 パーセントを 13 才以上向けの図書とすることが望ましいとされてい

る。”¹⁶⁾

(3) 狭義のジャンル(文学形式)と題材による分け方。

これは、Lillian H. Smith¹⁷⁾ や、わが国の例でいえば、松村武雄博士の“童話及児童の研究”¹⁸⁾のような児童文学評論の文献や、Hollowell,¹⁹⁾ Arbuthnot²⁰⁾ などの代表的な児童文学アンソロジーにみられる分け方で、児童図書にあらわれる代表的な文学形式に基づいたものである。多少の相違はあるが、民話、神話、英雄譚、ファンタジー、詩、小説(写実小説、冒険小説)、歴史小説、知識の本、科学、歴史、地理、絵本などが主なものである。その中では文学的香りの強いものが主体であり、いわゆるノンフィクションは附随的に加えられているにすぎない。この分け方は、評論やアンソロジーが多く採用していることから判るように、児童文学形式としての各ジャンルの特質を研究しようとする際に便利であり、従って、児童図書館員や教師が、児童文学に関する基礎的な知識を組織的に得ようとする場合に役立つアプローチである。特に児童文学の知識の母体となる古典的な名作は、このようなジャンルに分けて紹介されている場合が多い。

従って、児童室の蔵書構成や配列にこの分け方をそのまま適用すると、文学及び古典偏重となるおそれがあるが、図書館学校図書室、大学の蔵書の一部として、大学生、研究者を対象として児童図書を収集する場合は、その配列においても参考となる点が多い。

(4) 児童の年令別、発達段階別による区分。

児童は、成長と共に、その読書興味も変化発展していくものである。もちろん、個々の児童によって読書興味は全く異なる場合が多いのであるが、一応年令的な発達段階を幾つかに分けて、各段階における集約的な読書興味を列挙して、その興味にがい当するように図書の種類を区分する方法である。この区分は、読書指導の分野における理論や技術の研究の発展に伴って、従来の児童図書の歴史的考察や主題別あるいはタイプ別の研究と全く異なるアプローチとして近年特に重要視されるようになってきたのである。即ち、児童と図書を結びつけること、あるいは児童と読書を関連づけて考えるときには、どうしても、児童の発達段階において示される特徴を読書興味の面から捉え、その興味に適切な図書群をみつけることが必要になる。この場合には読書興味を図書で扱う主題あるいは題材と同意語に考えて、各発達段階において児童が主として興味をひかれる主題をあげることによって区分を示すことになる。しかしながら、ここで問題となることは、同じ主題をとりあつまっている図書でも、

その表現の難易度によって、必ずしも特定の発達段階、即ち、その主題に最も強い興味を示す発達段階と結びつかない場合があることである。更に、これを逆にみれば、ある一つの主題に興味を示すのは、特定の発達段階に限らず、一つあるいは二つ以上の発達段階の児童である場合も多い。

また、発達段階そのものの区分が、大きな場合と小さな場合があり、発達段階をこまかく区分すればする程、上にあげた二つの問題点が処理しにくくなってくる。

児童の読書と発達段階との関連は非常に重要であり、この問題の最も網羅的且つ専門的な分析は、“Youth, communication and libraries”²¹⁾ に示されている。また、その結果、爾後の児童図書あるいは読書指導に関する研究書は、児童図書の発達段階別による区分を大巾にとりあげるようになった。

この区分は、教育課程に直結して、また、学年別に読書指導を行なう場合に、その材料となる児童図書を求めるのに、非常に便利な区分であるが、この区分を図書館における児童図書の配列や分類にそのまま適用することは、前述の二つの問題点から、相当数の図書の重複を行なわない限り、殆ど不可能に近いことである。例えば、“アリスのふしぎな国のぼうけん”一冊を、何年生向きに配架するかということだけでも、議論百出することは間違いない。

(5) 目録作製のために一定の分類コードに従うもの。いわゆる基本図書目録類における児童図書の分け方である。多くの場合、アメリカ、イギリスでは D.C., 日本では N.D.C. の分類に従って、図書目録が作られている。しかしながら、このような場合でさえも、利用の便宜を考えれば、児童図書の特殊性ということから、分類だけで処理せず、他のグルーピングも併用されて当然であり、事実すぐれた児童図書目録は、そのようになっている。例えば、Wilson で出版している“Children's catalog”²²⁾ は、全体を大きく、I. Classified catalog と、II. Graded list に分けている。I. Classified catalog の部分は、更に、Non-fiction (0-9門)、Fiction, Story collections (全集もの、アンソロジー)、Easy books (絵本)の4領域に分れている。II. Graded list は、全書目を、K, K-1, K-2, K-3, K-4, 1-3, 1-4, 2-3, 2-4, 2-5,8-9, の24段階に(K: Kindergarten, 9: 9th grade 日本の中3年生にがい当)に分けている。また、著者、書名、叢書名、件名、の一連索引その他すぐれた特徴がこの“Children's catalog”にあるが、ここでは

児童図書の領域区分と分類

詳述を避ける。

このように D. C. あるいは N. D. C. のような、スタンダードな分類コードによる児童図書の分類は、最も客観的であり、普遍的であると思われるが、もし、図書館児童室における全蔵書を一律に同一分類法に従って分類してしまうと、児童の発達段階その他の重要な要素が無視され、読書興味を啓発する上からも難点が生じ、また、分類番号そのものは、児童の立場からは非常に難解かつ時には不必要なものであり、求める本をさがす上で、必ずしも有効な方法とは考えられない。

(6) (2)(3)と(4)の組み合わせによるもの。即ち、児童の読書興味と、文学形式(狭義のジャンル)と、児童の発達段階を組み合わせ、それぞれの利点を生かし、欠点を補うグルーピングとしたものである。A. L. A. で毎年すぐれた児童図書を紹介する “Notable children’s books,”²³⁾ また同様趣旨でニューヨーク公共図書館児童部で一般父兄を対象に作る年間優秀図書のリスト “Children’s books suggested as holiday gifts; on exhibition in the central children’s room.”²⁴⁾ また、カナダのトロント公共図書館少年少女部の “Books for boys and girls”²⁵⁾ などは、その代表的な例である。多少の差異はあるが、大体次のように児童図書を区分している。

Picture books
For younger readers (Easy books)
Folk and fairy tales
Myths and hero tales
Fantasy
For older boys and girls (Stories)
Famous people (Biography)
History
Lands and people (Geography)
Nature
The sciences
Things to do (Hobbies, sports)
Art
Poetry
Religious books
Reference books

この区分をまず児童図書のタイプの上から考えてみると、出版の傾向からいっても、絵本、低学年向き図書、中・高学年向き、あるいは中学生向き図書、参考図書、美術書などそれぞれ独自の形態、装丁を持つものが、この

区分で無理なく分けられる。つぎに主観的に考えてみても、これだけの区分で、児童図書は、大体分けられるし、低学年、幼児向きとなるほど、さまざまな主題が一冊の図書の中に含まれることが多くなるが、その点も、絵本、Easy books を独立させてあるので、充分処理できる。また、この主題群は、児童の読書興味と重なるものといっても差支えない。

また、発達段階の観点からみても、絵本が最初にくるのは当然であり、次第に文章要素のふえる Easy books に進み、昔話や、フェアリーテールズを経て、神話や伝説に進み、また同時に、創作文学の分野では、空想的なもの、あるいは写実的な物語や、高度の文学作品に関心を示すようになる。また、児童の読書興味は、他の学習活動や遊びにおける興味と結びついて、伝記、歴史、外国の事情、博物、科学、各種の趣味の本を当然求めるようになる。また、一部の子どもは、詩も読めば、宗教についても関心を持つ。そして、何かを調べる参考書も一つのグループとなる。

もし、児童室の蔵書が、このような区分によって配架されていたら、利用は便利であり、読書興味の啓発も、欲求の充足も、発達段階にそくした変化にも、過不足なく応じられることとなる。そして、もし、心要とあれば、このような区分の中、更にこまかい分類を必要とする領域を選んで、それをスタンダードの分類の対象とすればよいのである。そしてそのスタンダードの分類を児童図書に適用する際に、次のような諸問題の分析が必要となる。

2. 児童図書の分類

図書館の立場から児童図書を考察する場合には、これまで述べてきたように、児童図書を一つのアカデミックな研究の対象とするよりも、児童によって利用される資料として practical な考察なり内容分析なりを行なうことが重要である。従って、分類に関しても、学問上の知識の系列なり、研究上認められているジャンルによって分類することよりも、利用者である児童が最も頻繁に思いつき、且つ利用しやすい主題あるいは項目のもとに、類似の資料を集めて配列することを目的として分類を行なうことがより重要である。

図書館にくる児童が、その求める図書をどれ程容易に見ることができるかは、その図書館において蔵書がどのように分類配列されているかによって大きく影響される。

児童室における図書の配列は、利用者主題の二つの複合的な要素に基づいてなされなければならない。

利用者の要素については、三つまたは四つのグループ

が一般的に考えられる。①絵本や、やさしい読物を主として利用する8才乃至は9才以下の幼児低学年グループ、②それ以上の年令の児童一般、③いわゆる参考図書の利用者、そしてこの原則的な三つのグループに加えて、④中学生以上で一般成人室利用の対象とならない中間グループも特に考慮しなければならない場合もある。

次に、N. D. C. その他のスタンダードな分類法は、元来、成人の図書を対象として作られたものであり、それを児童図書の分類に利用する場合に、どの程度に適用すべきかが問題となる。

この適用に関しては二つの考え方がある。その一つは、児童図書も成人図書と全く同様に分類すべきであるという考え方である。即ち採用する分類法と分類深度は、両者同一にするというのである。その理由としては、児童の時から一貫した図書館の分類に習熟させるという教育的意義と、成人室図書と児童室図書が全く同一の分類法に従うことによって、必要に応じての両者間の蔵書交流、即ち、成人室における児童図書の利用、児童室における成人図書の利用が、何らかの分類上の変更なしにスムーズに行なわれるという点があげられる。

これに対してもう一つの考え方は、児童図書の分類に関しては、同じ分類法によるとしても単純化して適用するか、適当な変更を行なって利用者である児童のレベル、興味に適したものとすること。あるいは、同一図書についても、成人図書として扱う場合と、児童図書として扱う場合で、全く異なる分類が施こされるという考え方である。

また、一定の分類法の適用に関して上述のように異なった考え方があるように、分類を適用する図書の範囲に関してもさまざまな考え方がある。

まず、一般的傾向として、幼児、低学年を対象とする絵本及びやさしい読物 (Easy books) は、分類法を適用する分類の対象とせず、著者あるいは書名による音順の配列、あるいは、サイズによって配架する方法などがとられている。

Fiction に関しては、二つの考え方があり、その一つは、著者名あるいは書名による音順配列であり、別の一つは、学校小説、冒険小説、歴史小説、などテーマによりグルーピングを行なって、その中を著者名による音順とする方法である。Fiction の著者名による音順配列は、アメリカの公共図書館においては、成人図書の場合にも最も普及している方法であり、Asheim は、次のように述べている。“ほとんどの公共図書館においては、

fiction は全く分類せず、時代、国語、文学上の評価、テーマの如何にかかわらず、同一のセクションに著者順に配架されている。従って fiction のセクションにおいては、全く関連のない作品が相互に隣り合うこともあるが、リクリエーションの目的で小説をさがす者には、自由な選択の機会を与えるし、また、ある一人の作者の作品を同時に必要とする学生などにとっても、著者名順で並んでいるために非常に便利である……しかしながら、大学図書館や高校図書館においては、fiction は、リクリエーションとしてよりも、課題として読まされる場合が多いので、分類されているのが普通である。この場合には、文学作品と、その作品についての図書が同一セクションに配架されている。”²⁶⁾

これに較べて日本の児童図書分類の傾向として、“100区分(綱)でとどめ、290(地理、紀行)と日本文学(910)のところなど必要に応じて1000区分(目)する。”²⁷⁾などと児童図書館ハンドブックにあるように、文学の項目も、fiction と non-fiction、即ち、創作々品とそれに関する図書の識別は一切されていない。つまり、児童の読書興味であるとか、利用者の性向は一切無視された分類法の適用がなされているのは研究不足といわざるをえない。

Non-fiction の分類については、前述の一般的傾向としてあげたように、成人図書と同一の分類法を同じ分類深度あるいは深度を浅くして適用する方法と、成人図書の分類法と全く異なる分類コードを適用する方法とがある。後者は、児童図書館における一般的傾向としては、児童の読書興味に基づく幾つかの主題と、図書のタイプの組合せによるグルーピングが最も普及している。

この二つの主な傾向について、McColvin は次のような意見を述べている。“私は、この何れの方法にも偏見をもっていない。成人用図書の分類を、適度に簡略化し、綱以下の細分類への展開を適当に制限し、更に、児童の利用に適切な標目を使用することが可能なら、原則的には、類及び綱をそのまま適用しても一向差支えない。しかしながら、過度の分類(訳者註：分類深度を増し、分類番号の桁数を大きくすること)は、避けるべきで、蔵書数の少い時は尚更である。過度の分類は、分類作業上困難且つ混乱を招くおそれがあるばかりでなく、利用者が資料を検索するのをかえって困難とする場合がある。”²⁸⁾

このように述べた後 McColvin は、英米における大都市公共図書館の児童図書分類の例をつぎのようにあげて

児童図書の領域区分と分類

いる。これは、児童の読書興味と児童図書のタイプと、更に発達段階を加味してのグルーピングである。これは、前節であげた六つの考え方の中、6番目にあげたものにがいだし、それを若干細分化したものといえる。

Picture books

Little children's books——読み方をおぼえはじめる
低学年児童に適するもの。

Fairy tales——民話とアンデルセンの作品を含む。

Legends

Myths

Epic heroes——伝説上の英雄物語で文学作品として
まとめられているもの。

Exploration——新天地発見の物語。この中には地理、
紀行文、いわゆる開拓者物語は含まれない。

Famous people——伝記

History——国別により細分。

Geography and description——現代の地理及び旅
行。未開地の科学調査なども含む。

Natural history——植物、動物を含む博物。医学は
含まれない。

Science——地学、天文学、化学等々。

Practical science——工学及び産業。

Things to do——工作、趣味など。

Art——建築、彫刻、デザイン、絵画等。

Music——理論、鑑賞、オペラ物語など。

Plays——演劇、服飾などを含む。

Poetry

The Bible

Standard fiction——幼児、低学年向きを除く、古典
的作品。

Fiction——Standard fiction に含まれない他の fic-
tion は、著者名の音順に配架される。”²⁹⁾

以上児童図書分類の問題点について述べてきたが、児童室においては、数字による分類表を適用する場合も、あるいは主題、タイプ、発達段階の複合要素によってグルーピングをする場合でも、児童に対して判り易い書架案内を掲示することが重要である。

以上第Ⅱ章における児童図書の領域区分と分類として引用したものから、主題またはタイプを示す標目として使われている用語をアルファベット順に一覧表にしてみると次のようになる。この表の作成に当たって、①二つ以上の同意語がある場合は、より普遍的なものにまとめ、矢印をもって参照を示し、②一つの主題だけを示すものと、二つ以上の主題の組み合わせを示すものは別個の標目としてとりあげた。

	1	2	3	4	5	6	7	8
Animal stories		✓						
Animal & other nature stories			✓					
Art	✓			✓				
Art, music & plays								✓
The Bible				✓				
The Bible & Bible stories		✓						✓
Biography	✓	✓	✓	✓				✓
Biography, history & travel					✓			
Books of knowledge							✓	
Books of fact→Books of knowledge	—	—	—	—	—	—	—	—
Exploration				✓				
Fables, myths & epics		✓						
Fairy, folk and legendary tales					✓			
Fairy tales (folk tales の意味)→Folktales	—	—	—	—	—	—	—	—

	1	2	3	4	5	6	7	8
Fairy tales (Andersen & Fantasy)			✓	✓				
Famous people→Biography	—	—	—	—	—	—	—	—
Fanciful tales→Fantasy	—	—	—	—	—	—	—	—
Fantasy	✓	✓				✓	✓	
Folktales	✓		✓			✓	✓	
Folk & fairy tales				✓				
Geography and description				✓				✓
Gods and men→Myths	—	—	—	—	—	—	—	—
Heroes of Epic & saga							✓	
Hero tales			✓			✓		
Historical fiction→Historical stories	—	—	—	—	—	—	—	—
Historical stories		✓					✓	
History	✓			✓				✓
Hobbies					✓			
Household tales→Folk tales	—	—	—	—	—	—	—	—
Lands and people→Geography	—	—	—	—	—	—	—	—
Legends				✓				
Little children's books				✓				
Modern fanciful tales→Fantasy	—	—	—	—	—	—	—	—
Music				✓				
Myths			✓	✓		✓	✓	
Myths & hero tales			✓					✓
Nature	✓				✓			
Natural history				✓				✓
Nonsens songs, & games					✓			
Picture books	✓			✓	✓		✓	✓
Plays				✓				
Poetry		✓		✓		✓	✓	✓
Poetry, modern			✓					
Poetry, traditional			✓					
Poetry & plays					✓			

児童図書の領域区分と分類

	1	2	3	4	5	6	7	8
Practical science				√				
Realism stories→Realistic stories	—	—	—	—	—	—	—	—
Realistic stories						√		
Religion	√							
Romantic stories						√		
Sciences	√			√	√			√
Standard fiction				√				
Stories	√				√		√	√
Stories for younger children	√				√			√
Things to do				√				√
Traditional fairy tales→Folk tales	—	—	—	—	—	—	—	—
Words and signs					√			

- ① A. L. A.
- ② Arbutnot
- ③ Hollowell
- ④ McColvin

- ⑤ The New York Public Library
- ⑥ Rawlinson
- ⑦ Smith, L. M.
- ⑧ Thomson

3. 結 論

この一覧表を作った目的は、児童図書のグルーピングとして、どのような類別が最も多く使われ、また、どのような主題の組み合わせが最も多いかを傾向的に知ろうとしたことにある。分析の対象としては、引用例の数が少く、また、全く任意の抽出であるために、結論としての分類標目表を作成することができないのが残念であるが、類別を示す標目として使われている用語について、次にあげるような興味ある問題がでてきた。

(1) Fiction 及び Non-fiction は、図書内容について大きな概念を示すことばであって、標目としては使われていない。

(2) 従って Fiction の代りに、Stories が用いられている。

(3) Books of knowledge あるいは Books of fact という用語は、Books of fancy あるいは Books of imagination に対することばとして、大きな概念を示し、主題を示す用語としては、範疇が大きすぎて使われない。

(4) 同一用語が、別の主題内容を意味する場合がある。例えば、Fairy tales は、Folktales (民話) を意味

する場合と、Fantasy 即ち、アンデルセンの作品や“アリスのふしぎな国のぼうけん”のような空想にもとづく創作々品のジャンルを指して使われている場合とがある。また Folktales と、Fantasy の混同を避けるために、前者を Traditional fairy tales とし、後者を Modern fanciful tales と厳密に区別している場合もある。

(5) Bible が Religion の主題を示す代名詞として使われているほど、西欧の児童図書の宗教分野では、キリスト教の影響が強いこと、またキリスト教に関する図書が他の宗教に関する図書に比してより多く出版されていることが推察できる。

(6) Biography, Myths, Geography, Languages などの件名標目の代りに、Famous people, Gods & men, Lands & people, Words & signs など子どもに親しみやすいことばを用いているのは、読書興味を啓発する上で、慎重な配慮といえよう。

III. 児童図書の利用者

前述したように、図書を分類する目的は、図書の利用者が最も利用しやすいような範疇に分けて配列することに

ある。従って図書館の種類によって、利用者の対象や利用目的が全く異なってくるために、同種の図書が同じ分類コードによって分類されるとは限らない。

児童図書のコレクションも、公共図書館、学校図書館、大学図書館、研究所図書館等、その置かれる場所によって利用者が異なり、利用目的が変化してくるので、分類の立場からも利用者の特徴を捉えておくことが必要である。

1. 公共図書館児童室の利用者

公共図書館における児童図書の蔵書は、通常、独立した児童室がある場合には、そこに一括配置されるのが常識であるが、児童室に配置されているからといって、児童図書の利用者は、児童に限られているのではない。

公共図書館に児童図書が置かれる場合、その利用者に関しての第一の特徴は、年齢及び利用目的が、学校図書館や大学図書館に置かれている児童図書の利用者比べて、非常に巾が広いことである。即ち、幼児から中学生に至る児童のほかに、母親、教師、大学生、作家、編集者、出版者、報道関係者、児童福祉関係者など成人の利用者が、それぞれ異なった目的のために児童図書を利用することにある。そして、この児童と成人の両者による利用に対処するために、一般的に利用される児童図書のほかに特殊な児童図書を選別して、特別蔵書として扱う方法がある。その一例としては、ニューヨーク公共図書館やクリーブランド公共図書館などの大図書館の児童室で行なわれている方法がある。“ニューヨーク公共図書館の児童室の蔵書中 Reading Room Collection と呼ぶ特別の蔵書について特筆する必要があると思う。この Reading Room Collection は、特別図書とでも訳すべき意味を持ったものである。これは、新刊再版の何れを問わず、Literature Specialist (ニューヨーク公共図書館児童部の図書選択の責任者の役職名) の推薦及び個々の児童図書館員の判断により、文学的水準からいって恒久的価値のあると思われる図書は、必ず1部は、一般貸出し用のものとは別に読書室用の特別図書として、その利用を館内の閲覧にのみ供する特別の蔵書である。”⁸⁰⁾

わが国に於ては、児童図書の歴史的価値のあるものが、蒐集され整理され且つ利用に供されている場所が無いのが残念であるが、これは、大都市における公共図書館の児童室の重要な機能の一つといつてよい。このような特別な蔵書によって、稀覯書又は絶版となっているものをも含み、恒久的価値のある代表的な児童図書を、前記の成

人利用者が有効に利用できるばかりか、このコレクション自体が、児童を対象とする児童図書をたえず新鮮に流動させながらも質の基準を保っていく上での具体的な尺度となるのである。現にニューヨーク公共図書館の優秀な児童図書館員の持っている児童図書に関する卓越した識見は、この Reading Room Collection の絶えざる研究読書により培われているものである。

利用者に関する第二の特徴は、利用者をいつでも個人を単位としてみなければならぬということである。つまり児童に限って考えてみても、“家庭環境はもちろん、興味、関心、年齢、学年、能力、また図書館に来る目的などすべて異なる子どもたちが、児童室に来るのである。……学校図書館と違って、児童室にでかけて来る子どもたちは、それぞれ好きな格好で好きな本を読み、好きなことを考え、また読んだ本の感想文を書く義務もなければ、読書記録と成績の関係を心配する必要もない。もちろん学校と違って試験もないし、兄弟とつれだつて来ることも、母親と来ることも、ほかの学校の友だちと来ることも、また2年生が5年生の本を読んでも、中学生が小学生向きの本を読んでも、誰もなんともいわないのである。そればかりか、5分間で帰ってもよいし、何時間ねばっていても、誰も文句をいう人はないのである。”⁸¹⁾

そして、第三の特徴は、既に述べられたことであるが、換言すれば、利用が自主的な動機による場合が多いということである。

更に、第二、第三の特徴は、個人を単位として自主的な利用をする利用者の求める内容を予測することができないという第四の特徴を招来する。学校、大学、専門の各図書館の利用者は、その利用が、それぞれ学校、大学、専門の機関そのものによって動機づけられている。つまり、教育課程なり、一定の系統に従って要求をある程度予測できる利用者のグループである。しかしながら、公共図書館は、地域社会の全人口が利用者となる可能性を持ち、従って、その要求を一定の傾向として予測することは不可能である。

その目的及び機能に関して公共図書館は専門的であるよりも一般的であり、集中的であるよりも全般的である。また公共図書館は、公衆の要求を偏らず満足させる能力を持たなければならない。このような特性を持つ公共図書館の場合には、児童図書の蔵書内容も、より一般的、全般的な機能を果し、且つ、千差万別の要求に応えられるように、普遍的なものとする必要がある。従って、小、中、高の区別を持つ学校図書館の平均蔵書よりも巾のあ

児童図書の領域区分と分類

る蔵書内容が妥当であり、また、成人図書を同一建物内に持つという利点から、どのような主題に関しても、児童の要求に応じ得る可能性がより大きいのである。

2. 学校図書館の利用者

公共図書館と比較して、学校図書館の最も顕著な特徴は、図書館は学校の一部であり、一定の計画に基づく教育課程の展開に必要な要素、つまり、正規の学校教育の課程に必須の施設の一部であるということである。図書館がある機関なり組織の一部として存在する場合は、その親機関の要求に従って、購入される図書館資料の性格なり量が限定されてくるのは当然である。学校図書館の蔵書は、公共図書館でいう児童図書にくらべて、学校のレベル、規模、種類などの条件に影響される意味で、より特殊である。また、公共図書館児童室図書の中核は時代によりそれ程の影響を受けないものであるが、学校図書館の蔵書は、教育技術なり教育形式の変化によって相当の影響を直接に受けることとなる。

学校図書館の利用者の特徴は、ここで更めて挙げるまでもなく、年齢、環境、利用の動機、要求の内容などに関して、具体的あるいは傾向として推測することの容易なグループである。即ち、児童については、年齢は学年から、環境は通学地域から、利用の動機、要求の内容については教育課程の展開、趣味興味などの動向を知ることにより、容易に推測することができるのである。また教員の利用傾向についても、教科の内容との結びつきから容易に予測されるものである。何れにしても、学校図書館の蔵書の構成要素は、あるレベルの教育課程の展開に最も役立つ図書及びその他の資料が中心であり、これに反して、公共図書館の児童図書は、レベルについても範囲についても、児童図書を利用するあらゆる階層の人びとの要求に応じられる普遍性を持たなければならない。

しかしながら、一つの地域社会においては、同じ児童が学校図書館の利用者でもあり、また公共図書館の利用者でもあることを考えれば、分類については、基本的には両者に共通であることが最も望ましいのである。

3. 大学図書館、研究所図書館における利用者

これまで述べてきたように公共図書館の児童図書の利用者は、広い階層の人びとであるとはいえ、その大部分は、リクリエーションを目的とする児童である。学校においては、当然のことながら学習に直結する利用が中心

であり、利用者は生徒が大部分である。

大学図書館においては、文学研究、児童研究、あるいは教育研究の立場から、児童文学史、児童文学の著名な作家に関する研究書その他児童図書に関する研究書が求められる場合が多く、また、これらに関する学術誌も当然求められてくる。教育研究所等の図書室においても、同種の研究書は必須の資料となるが、大学及び研究所図書館においては、公共図書館児童室あるいは、小中学校図書館において児童、生徒によって利用される児童図書が、研究に必要な資料として収集される必要性も起ってくる。

この場合には、代表的な古典、現代の児童には全く顧みられないものでも歴史的には価値のあるものなどがその中心をなすが、時には、研究の目的により、いわゆる良書ばかりでなく子どもに悪影響を与える悪書が収集される場合さえもでてくるのである。

近来、各大学において、児童文学を卒論に選ぶ学生、また教育学の分野において児童図書を研究するもの、学校図書館の立場から児童図書を調べるもの、また広く児童文化の立場から調査するものなどが多くなり、また、児童文学講座などの開講される例も増えてきたが、積極的に児童図書を大学教育にあるいは研究に必要な資料として集め始めているところは殆んどないといってもよい。しかしながら、公共図書館においても、学校図書館においても、児童図書は利用につれて消耗していくものであるから、児童図書に関連ある講座を開講している大学においては、積極的に大学図書館資料として収集することを考えてもよいのではなかろうか。

結 び

以上、児童図書の領域区分と分類の関連について、図書館資料として児童図書のもつ特殊性、即ち、主題、形態、タイプ、年齢的要素などの複合した多様性と、また、利用者の多様性、即ち、年齢、利用の動機、興味関心、読書能力などの諸要素を、児童図書の分類上どのように生かしていったらよいかを分析しようと試みたのである。イギリス、アメリカにおける児童図書館の実例は、既に長年月にわたる実験を経てきたものであり、その点非常に参考とする点が多い。

但し、ここに引用した諸例をわが国において適用する場合は、わが国の児童図書の傾向や図書館の実情に応じた実験的研究と、それに先立つ調査が必要である。つまり(1)最近の傾向としては変化しつつあるが、児童図書

の出版量の中で、いわゆる文学領域以外の図書の占める割合、(2) 学校図書館、公共図書館児童室における蔵書構成の現状、(3) わが国の児童の発達段階と読書興味のより具体的な実例などの調査が行なわれ、その上で読書興味と結びつき、且つ児童図書の特殊性に即した分類が実験され開発されるのが最も望ましいのである。

- 1) 九鬼周造. 文芸論. 東京, 岩波書店, 1941. p. 1.
- 2) Van Dyke, Henry. *The spirit of America*. New York, Macmillan, 1910. p. 242.
- 3) Asheim, Lester. *The humanities and the library*. Chicago, A. L. A., 1957. p. 201.
- 4) Hollowell, Lillian. *A book of children's literature*. 2d ed. New York, Rinehart, 1939. p. 3.
- 5) Rawlinson, Eleanor. *Introduction to literature for children*. New York, Norton, 1931. p. 3.
- 6) Meigs, Cornelia, et al. *A critical history of children's literature; a survey of children's books in English from earliest times to the present, prepared in four parts under the editorship of Cornelia Meigs*. New York, Macmillan, 1953. 624p.
- 7) *Ibid.*, p. vii.
- 8) *Ibid.*
- 9) Smith, Lillian H. *The unreluctant years; a critical approach to children's literature*. Chicago. A. L. A., 1953. p. 7. 訳書が「児童文学論」として、石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男共訳で岩波より出版、1964.
- 10) Quiller-Couch, Sir Arthur. *On the art of reading*. London, Cambridge Univ. Press, 1920. p. 198-9.
- 11) Smith, Elva S. *The history of children's literature; a syllabus with selected bibliographies*. Chicago, A. L. A., 1937. p. x.
- 12) Arbuthnot, May Hill. *Children and books*. Chicago, Scott, 1947. p. iii.
- 13) Rawlinson, *op. cit.*, p. 5.
- 14) McColvin, Lionel R. *Libraries for children*. London, Phoenix House, 1961. p. 19.
- 15) *Ibid.*, p. 19-42.
- 16) *Ibid.*, p. 37.
- 17) Smith, Lillian H., *op. cit.*
- 18) 松村武雄. 童話及児童の研究. 東京, 培風館, 1922. 486, 100p.
- 19) Hollowell, *op. cit.*
- 20) Arbuthnot, May Hill. *The Arbuthnot anthology of children's literature*. Chicago, Scott 1952. 626p.
- 21) Henne, Frances, et al., ed. *Youth, communication and libraries; papers presented before the Library Institute at the University of Chicago*. August 11-16, 1947. Chicago, A. L. A., 1949. 233p.
- 22) *Children's catalog*. New York, Wilson, 1909.
- 23) American Library Association. Children's Service Division. *Notable children's books*.
- 24) New York. Public Library. *Children's books suggested as holiday gifts; on exhibition in the central children's room*.
- 25) Thomson, Jean. *Books for boys and girls*. Toronto, Ryerson Press, 1959.
- 26) Asheim, *op. cit.*, p. 203.
- 27) 日本図書館協会. 児童図書館ハンドブック. 東京, 1963. p. 98.
- 28) McColvin, Lionel R. *Public library services for children*. Paris, Unesco, 1957. p. 29.
- 29) *Ibid.*, p. 29-30.
- 30) 渡辺茂男. “The New York Public Libraryにおける児童サービス,” 図書館学会年報, vol. 3, no. 4, 1957, p. 132. に報告してあるものに補筆したものである.
- 31) 日本図書館協会, *op. cit.*, p. 21.